

平成28年度 スーパーバイザーによる学校教育支援事業報告書

【研究テーマ】

『学び合い、語り、つながる生徒の育成』
～仲間とともに主体的に高め合う活動を通して～

米子市立尚徳中学校

スーパーバイザー：

学びの共同体研究会かわち学座（元東大阪市立金岡中学校長）馬場 宏明 先生

1 はじめに

本校は、米子市の南に位置し周囲に田畑が広がる生徒数305人（男子182人 女子123人）の学校である。生徒には活気があり、尚魂祭（体育祭）や尚郷祭（文化祭）では生徒会を中心となって行事を運営していくとともに、縦割り活動を通して先輩の姿に学んだり、学校全体の一体感を高めたりしている。

本校の生徒は、学習面において、全体的には落ち着いた態度で授業にのぞんでおり、与えられた課題には一生懸命取り組む生徒がほとんどである。しかしながら、自ら進んで主体的に学習に取り組んでいる生徒が多いとは言えないのが現状である。また、学習意欲や基礎学力の低さのため学びから逃げる生徒や、学習内容を理解したいと思ってもその方法がわからずに困っている生徒もいる。これらを要因として学力不振に陥る生徒が生まれ、不登校や問題行動のきっかけとなっている。

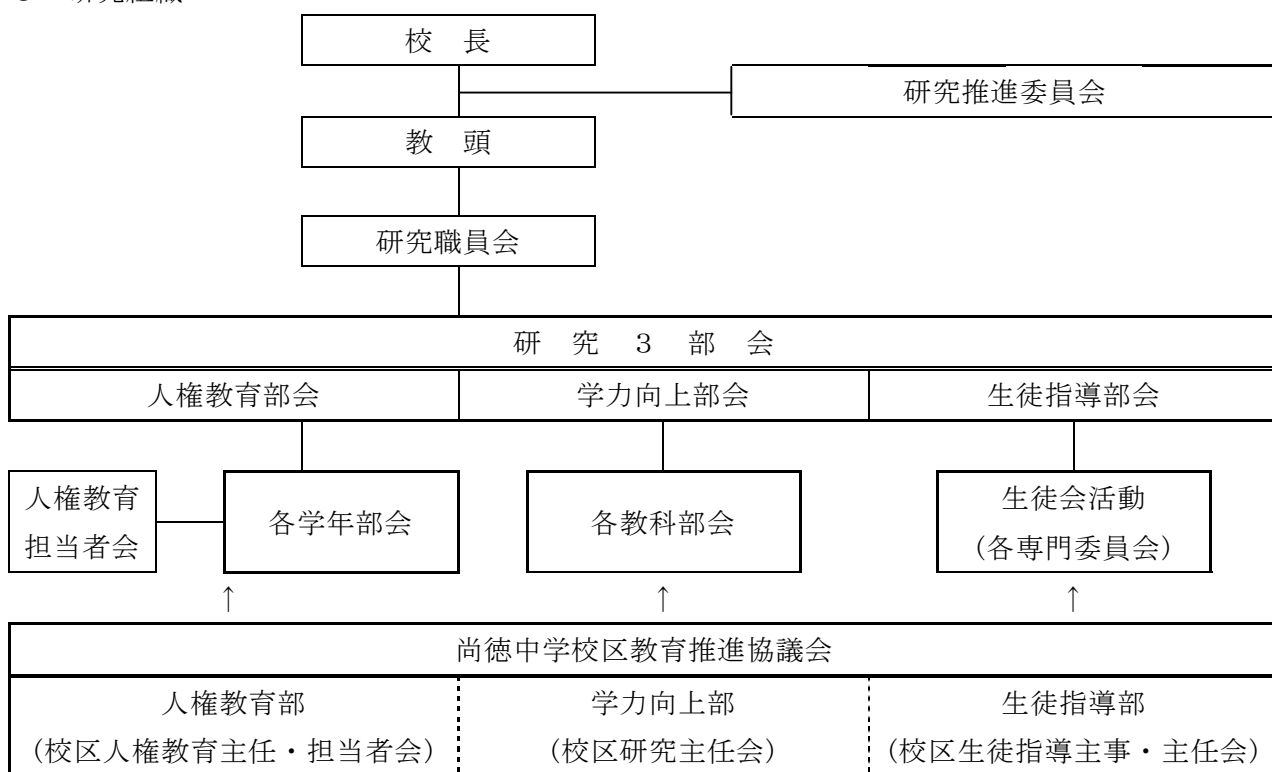
2 研究のねらい

このような生徒の実態および本校の課題から、個々の生徒の自尊感情や人間関係構築力、基礎学力や主体的に学ぶ力を高める必要があると考える。そのためには、生徒と教師の関係を中心とした教育活動だけではなく、生徒同士のかかわり合いのある活動を経験させることが重要になる。なぜなら、自尊感情は、自己と他者とのかかわり合いの中で自分をかけがえのない存在として認識することにより育まれるものだからである。

この考え方にもとづいて、本校ではここ5年間、「学びの共同体」の理論・手法を取り入れて、仲間とともに「学び合う」ことのできる授業づくりを進めてきた。仲間との「学び合う」授業は、分からない生徒にとっては、学ぶ楽しさを感じることができ、わからないことを仲間に訊くことにより学習内容がわかる喜びも感じることができ、授業となる。また、訊かれた側の生徒にとっても、相手に教えるという仲間への役立ち感が学習意欲につながる授業、相手に説明することによる学習内容への理解が深まり、学力向上が期待できる授業となる。

ここ5年間の授業づくりで、授業に落ち着いて取り組める生徒が大幅に増えたこと、学習内容を理解できていると肯定的に回答する生徒が8割以上になったことなど、多くの成果が出ていることから、「学びの共同体」理論・手法にもとづいた授業づくりは本校の諸課題の解決につながるものと考えている。

3 研究組織



4 「学びの共同体」理論に基づいた授業実践

→協同的な学び（学び合い）のある授業づくりのポイント

- (1) 仲間と協力して学び合い、認め合い、高め合う力の育成（学び合い、語り、つながる）
- (2) 「話を聞かせて分かせようとする授業」から「子どもがしゃべって分かる授業」へ
- (3) 協同的な学び（学び合い）をつくる使命と目的
- (4) 「学び合い」をする理由
- (5) 「学び合い」の二つの協同化 「個人作業の協同化」「異質な他者との学びの協同化」
- (6) 班学習とグループ学習の違いの明確化
- (7) 一斉授業とグループ学習の違いを明確にもつ
- (8) グループ学習は、一人一人を高める学習と知る
- (9) 「学び合い」の授業づくりの前提条件となる学習規律
- (10) 「学び合い」を支える人間関係づくり
- (11) 学びの授業と人権教育
- (12) 学ぶ価値のある課題設定 「共有課題」と「ジャンプ課題」
- (13) 基本的な授業の流れ
 - めあての提示→共有課題の提示（グループでの学び 全体での共有）
 - ジャンプ課題の提示（グループでの学び 全体で共有）
- (14) 教師の基本姿勢
- (15) 生徒の発言をつなぐ工夫
- (16) 机の配置

5 研究授業実践

本校教員が年間1回以上の研授授業を行い、事後の研究協議を実施するように計画を立てた。授業研究会の年間計画の中で、スーパーバイザーの馬場先生には、6月と12月に実施する校内授業研究会に指導助言者として直接指導を受ける機会を設定した。学びの共同体理論に基づいた授業実践を始めて6年目を迎えるが、毎年異動もあるため、この理論に初めてふれる教員はもちろん全教員が毎年新たに学び直すことの継続をしていくことが必要である。そういう意味でも直接先生からご指導いただけることは大変貴重でありまたとない機会である。

また、授業研究会を実施する際には校区の小中学校にも案内を出し、小中学校の先生にも参観していただくことで、中学校の取り組みの理解と忌憚のない意見交換の機会となった。

授業においては、A4の授業デザインの様式を採用し、次の3点を授業デザインの中に取り入れている。必然的に授業参観者の授業を見る視点もそれがポイントになる。

【授業づくりの視点】

「学びの共同体づくり」の理論・方法を取り入れ、仲間とともに主体的に高め合う活動を通して、「学び合い、語り、つながる生徒の育成」をめざした学習活動の展開

- ①学習のめあて・流れについて…本時の学習のめあてが明示され、生徒に学習の流れが伝わる効果的な導入
- ②課題設定について…生徒が主体的に学び、学習(教科)のねらいを達成するための「学ぶ値打ちのある課題」の設定
 - ・「共有の課題」(基礎・基本、知識・理解、技能)は、きちんと共有がはかられているか。
 - ・「ジャンプ課題」(応用・発展、技能、思考・判断・表現力)は、生徒をつなぐ課題か。
- ③学び合いについて…個々の生徒の学び(活動)や、生徒同士の学び合い(班・全体)が成立するための手立てや工夫。
 - ・「共有の課題」における班活動…個人作業の協同化。わからないときに訊くグループ学習。
 - ・「ジャンプ課題」における班活動…他者の意見を聞き、自分の考えを深め広げる姿・発言をうむための工夫。
 - ・全体学習(コの字隊型)…表現の共有。生徒が互いの意見を聞き合い、意見をつなぐ場面の手立て。



1年組 数学科 授業デザイン

- 日時・場所 平成28年6月20日(月)5階 1年 組教室
- 単元名 正の数・負の数
- 単元の日標 数の範囲を拡張して、計算の可能性をひろげ、数についての処理がいつでも手探しなくできるようにする。
- 単元の指導計画(全25時間、本時25/25)
 - 第1時～5時 正の数・負の数
 - 第6時～22時 正の数・負の数の計算
 - 第23時～25時 正の数・負の数の利用
- 本時の日標 正の数・負の数の加法を正確に行い、魔方陣を完成させることができる。
- 本時の学習過程

学習活動	形態	指導上の留意点、☆評価規準【観点】																																
1. 本時のめあてを確認する。	一言	○指導上の留意点、☆評価規準【観点】																																
めあて：正の数・負の数の加法を使って、次の魔方陣を完成させることができる。																																		
2. 共有の課題に取り組み。		○魔方陣の解き方を説明する。																																
課題：次の魔方陣を完成させよう。																																		
<table border="1" style="display: inline-table; margin-right: 20px;"> <tr><td>①</td><td>-4</td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td>-1</td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td>2</td></tr> </table> <table border="1" style="display: inline-table;"> <tr><td>②</td><td>6</td><td>-7</td><td></td><td>8</td></tr> <tr><td></td><td></td><td>0</td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td>-3</td><td>2</td></tr> <tr><td>-6</td><td>5</td><td></td><td></td><td>-9</td></tr> </table>			①	-4					-1					2	②	6	-7		8			0						-3	2	-6	5			-9
①	-4																																	
		-1																																
			2																															
②	6	-7		8																														
		0																																
			-3	2																														
-6	5			-9																														
3. 全体で確認し、共有する。	学習班 コの字	○途中の計算も式で書くように伝える。 ☆正の数・負の数を含む加法を計算し、魔方陣を完成させることができる。【技能】																																
4. ジャンプ課題に取り組み。		○絶対に答えがあることを伝え、不安感を持たせないようにする。																																
生徒が選んだ3つの数字で魔方陣の問題を作成し、その魔方陣を完成させよう。																																		
<table border="1" style="display: inline-table;"> <tr><td>○</td><td></td><td>○</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td>○</td><td></td></tr> </table>			○		○					○																								
○		○																																
	○																																	
5. 全体で確認し、共有する。	コの字	○ヒントカードを2種類用意しておく。 ○どこから書き始めるのが説明できるように記録を残すように伝える。																																
6. 振り返りとまとめをする。	コの字	○ランダムに選んだカードの数字でも魔方陣を完成させることができることを確認する。 ○数の間に関係があるのが次の単元で学習していくことを伝える。																																

授業参観記録用紙

指導科目 算数(数) 単元名 「正の数・負の数」

授業日 月 日() 期 学年/教科 1年/算数

授業者 参観者

1. 授業のめあてを確認し、共有する。

2. 共有の課題に取り組み。

3. 全体で確認し、共有する。

4. ジャンプ課題に取り組み。

5. 全体で確認し、共有する。

6. 振り返りとまとめをする。

7. その他、気づいたことなどお書きください。

学習班の観察記録用紙

3. 学習班の観察記録(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)

参観時間: (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9)

①	共有課題のととの学習の様子							
②	ジャンプ課題のととの学習の様子							
③	その他気づいたこと							

6 スーパーバイザー 馬場宏明先生による指導助言

- ・平成28年 6月20日(月) 研究授業参観 研究協議における指導助言
- ・平成28年12月 7日(水) 全校の授業の様子を参観
研究授業参観(尚徳中学校区交流授業研究会)
研究協議における指導助言

《馬場宏明先生の指導助言》

○めあての提示に関すること

- ・共有課題の説明は、ワークシートにしていねいに書いてあるのであらためて説明する必要はなく、できるだけ早くグループになった方がよい。
- ・めあてが事前に板書してあり、記入するところも指示してあるためスムーズにグループになることができていた。

○グループの学び合いに関すること

- ・「はじめは自分でやってください。どうしても分からなかったらグループの人に訊いてみよう。訊かれたらこたえてあげてね。」の言葉かけがあつて良かった。その言葉かけが「分からなかったら訊ける」という安心感がうまれるのでよい。
- ・「分からなかったら訊く」という習慣をつけることが大切。そうしないと、「教えてくれないから分からないんだ」と他人に責任を転嫁することになりかねない。分からないことをグループの仲間に伝える力をつけていくことが大切。
- ・机間指導の際に、発表者をワークシートにしるしをつけることで指名しているのは良いかわり。声に出して指名すると周囲の集中も切れてしまうので適切でない。
- ・グループになっても、まずは一人で考えないと意味がない。すぐに訊けるようにグループになっているのだという点をしっかり理解していないと意味がない。
- ・グループになったら教師は口出しをしない。教師は苦手な生徒を励ましグループにつなげていくこと。個人に「答が合っている」と声かけをしたり、説明をしたりするなど教師と生徒の一对一の会話はグループ学習の妨げにしかない。

○課題の全体での共有に関すること

- ・発表をすべて教師がさばくのではなく、生徒をつないでいく手立てを。「どういうことか?」「他の人は分かった?」などまわりに水を向けることで生徒同士のかかわりをつくっていく。
- ・発言の後すぐの拍手は良くない。そこで完結してしまい、深めるための意見や質問が出なくなる。拍手はすべて終わってからまとめてする方がよい。
- ・ジャンプ課題の練り上げで、「意見は変わりましたか?」の問いでは個で完結してしまうので、意見が変わった生徒に対して「どこでそう思った?」「なぜ変わった?」と突っ込むことで学びが深くなる。
- ・ジャンプ課題を提示してから、生徒の思考を深めるために、解答は勘で出すのではなく既習事項を活用して導くことを一言入れても良かったのではないだろうか。一人の生徒が思いついた計算方法を、答えのみ書かせるのではなく、その生徒になぜその解答が出たのか全体の場で説明をさせることができているならば、さらに思考を深めた学び合いにすることができた。
- ・生徒がでたらめを言ったりふざけたりしたような発言をしたときには完全に無視し目を合わせないくらいの対応をすればそのような反応はなくなる。
- ・共有課題の全体での共有は単なる答合わせではなく、生徒を育てる時間である。

○問いに関すること

- ・国語科の指導において、文章から離れた問いは発しない。教科書の本文が基盤になるのであって、「どう思う?」「作者はどんな気持ちで書いたのだろうか?」などは適切な問いではない。根拠のないところでの問いは空中戦になるだけ。
- ・「すべて書き出さない」などの問いは、「○個あげなさい」「○個見つかったけどあと1個は?」などかかわりがうまれる。
- ・初見で感想を書くのではなく、何度も読み込んだ上で感想を書かせる方が望ましい。

○共有課題とジャンプ課題の演習（数学科：式の計算の利用）

[共有課題]

公式を利用するとややこしい計算もやさしくなり暗算でも出来るようになります。基本公式を参考にして次の計算をしなさい。

$$\textcircled{1} 76 \times 76 - 24 \times 24 \qquad \textcircled{2} 111 \times 89 \qquad \textcircled{3} 29^2$$

[ジャンプ課題]

工夫して次の計算をしなさい。

$$\textcircled{1} 99 \times 99 - 45 \times 45 - 2 \times 45 \times 45 \times 55 - 55 \times 55$$

$$\textcircled{2} 214^2 - 2 \times 214 \times 89 + 89^2 - 181^2 - 2 \times 181 \times 94 - 94^2$$

○協同的な学びの哲学

- ・すべての子どもの学ぶ権利を保障する。
- ・すべての子どもを一人残らず学びに参加させる。
- ・教師全員が互いに学び合い教育の専門家として成長する。
- ・どの生徒も一人にしない…子ども同士がつながる。
- ・どの教師も一人にしない…先生同士がつながる（同僚性）

7 研究のまとめ

(1) 成果

- ・スーパーバイザーの馬場宏明先生から多くのご指導をいただき、本校の取り組む学びの共同体理論に基づく授業実践を積み上げていくことが出来た。この理論に初めて出会う者と何年も実践している者との経験や理解の差は日々の実践に大きく影響してくる。年度当初の研究職員会や日々の授業公開で研修を行うが、先生から直接指導をいただくことで理解から納得の段階へさらに深めることができる。指導のスキルアップや改善に直結する貴重な機会となっている。先生には授業デザインの作成段階からかかわっていただき、メールでやりとりする中で、先生からの助言をいかして授業デザインの改善をおこなったり授業のポイントをおさえていただいたりしている。今年度、1学期の中盤の6月と2学期の終盤の12月に指導をいただいたが、学年の始めとまとめの時期に指導いただけたため実践の振り返りや確認に非常に良い研究会となった。
- ・本校が実施する「学習状況アンケート」の、授業の中の学びによって「わかった」「できた」「力がついた」と感じる場合がありますかの問いに対して、概ね90%の生徒が肯定的評価をしている。また、授業でわからないことがあると、友達や先生に訊くことができますかの問いに対しても概ね90%の生徒が肯定的評価をしている。学びの共同体理論に基づいた生徒同士の学び合いのある授業実践が定着した成果だと考える。学校全体が同じ理論で授業実践を行う効果が発揮されているのではないだろうか。「生徒同士で学び合い、語り、つな

がる」実践が生徒に安心感と落ち着きをもたらしていると考える。

- ・来年度、本中学校区は米子市人権教育研究発表会の会場となる。研究の柱のひとつに「人権が尊重される学習活動づくり」があり、中学校区で取り組みを進めている。具体的には「一人一人が大切にされる授業」「互いのよさや可能性を發揮できる取り組み」である。この視点は、本校が実践をしている学びの共同体と合致しており、さらに研究を進めていく必要がある。12月に馬場宏明先生を指導助言者として招聘した研究会は本中学校区の授業研究会であったので、先生の指導助言を中学校区のすべての先生方が聞いたことは大きな校区の財産になったと考えている。

(2) 課題

- ・平成28年度の全国学力・学習状況調査の結果では、国語、数学ともA問題では概ね全国平均と同程度であったが、B問題では3ポイント以上下回る領域があった。個々の生徒の学力をさらに向上させる手立てが必要である。そのためには、[共有課題][ジャンプ課題]が学ぶべき価値ある課題設定になっているのかの吟味が必要である。また、とっとりの授業改善【10の視点】の中の、⑦学習評価の推進と⑧学習活動を振り返る活動の設定の視点が特に重要であると考えられる。
- ・本校の「学習状況アンケート」によると、約4割の生徒が計画的な家庭学習ができていないと回答している。家庭学習と授業をどうつないでいくのか、また内発的な学習意欲の喚起をどのように高めていくのか、家庭学習の定着に向けた手立てが必要である。これについては中学校区全体の課題でもあるため、共通の取り組みを進めているところである。

8 おわりに

馬場宏明先生に指導していただいて6年目を迎えたわけであるが、毎年的人事異動で教師が入れ替わる中で、スーパーバイザーは非常に大きな存在であり、6年間積み上げていくことができた要因の大きな要素であると考えられる。学びの共同体理論に基づいた協同的な学びの実践を今後も継続していき、「わからないと言える生徒とその人間関係づくり」「教え合いではなく学び合いのある授業づくり」を進めていきたいと考えている。

9 参考資料（学び合いのある授業づくり）

本校が実践している学びの共同体理論に基づく学び合いのある授業づくりについて説明します。

(1) 仲間と協力して学び合い、認め合い、高め合う力の育成(学び合い、語り、つながる力)

※1 問答法の見直し（教師の発問 → 挙手や指名による発表）… 全員参加の授業になっているのか。教師と一部の生徒によって授業が進められてはいないか。他の生徒はおとなしく聞いているだけの受け身的な学習になっていないか。生徒同士の話し合いや活動を学習の中心に据える。

※2 教科書に書いてある内容を黒板で説明しているような授業になっていないか。生徒は、板書をただ写すだけになっていないか。（教科書を読んで分かることは、個人で読んでしっかり考え、グループで話し合う。どうしてもわからないところは教師に訊く。）

※3 家庭学習で済むようなことを授業の中でしていないか。授業と家庭学習をつなぐ工夫。

(2) 「話を聞かせて分からせようとする授業」から「子どもが自分でしゃべって分かる授業」への転換

- ・自分で語れた(語り直せた)ときに分かる。(自分で説明できないようでは理解したとはいえない)

- ・教師がしゃべり過ぎない。大事なところだけ押さえる。生徒の活動や話し合いに時間を。
- ・「分かりやすい授業」から抜け出す、一歩越える。

(3) 「協同的な学び(学び合い)」をつくる使命と目的

- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| ① 子ども一人一人の学びを保障する。 | ⇒ <u>子どもたちを「学び」から逃がさない。</u> |
| ② 授業で一人残さず学びに参加させる。 | |
| ③ 教員全員が互いに学び合い、教育の専門家として成長する。 | |

※ 子どもの実態 … 不登校、いじめ、問題行動、低学力、学習意欲の欠如、発達障害など。
(クラスの仲間との人間関係が希薄。生活の中にしんどい状況がある。)



個別支援 … 別室や個別指導は、子どもを学級から遠ざけてしまう。
 集団保障の必要性 … この子たちなりに関わりが持てる集団を保障する。
 「学びから逃げる子どもたち」をグループで支え合う。「つながる先」をつくる。
 「つながる先」がもてる学習集団づくりをすることで、「居場所」づくりを行う。

(4) 「学び合い」をする理由(主に小グループによる協同的学び)

- | |
|--|
| ① <u>協同的学びは、学びの本質である。個人で行えるのは〈練習〉と〈記憶〉だけである。</u>
あらゆる学びは新しい世界との出会いと対話であり、対象・他者・自己との対話による意味と関係の編み直しであり、対話と協同によって実現している。
学びは師と仲間を必要としており、その根本において協同的である。 |
| ② 一人残らず子どもの学びの権利を実現するためには、協同的学びによって子ども同士が学び合うよりほかに方法はない。 <u>小グループの学び合いは、どの形態の授業よりも強制的に学びを促す機能がある。</u> 一斉授業であれば、聞いているそぶりをして学びを怠ることが可能である。 |
| ③ <u>小グループの協同的学びが、学力の低い子どもの学力を回復する機能を発揮すること。</u> 教師1人で、1学級40人近くの生徒一人一人の学力に対応した指導を行うのは不可能 |
| ④ <u>協同的学びが、学力の高い子どもにも、より高い学力を保障することである。</u> ただし、協同的学びに〈ジャンプ課題〉と呼ばれる高いレベルの課題への挑戦を含んでいなければならない。
また〈共有の課題〉において、学力の高い子どもは、わからない子どもへの応答によって「わかり直し」が経験できる。 |

(5) 「学び合い」とは(2つの「協同化」)

- | |
|---|
| ①「個人作業の協同化」
「自力解決」をしながら、困ったときに仲間の力を借りること。
「学び合う関係」は、わからない子どもが「ねえ、ここどうするの？」と質問することから出発する学び合いであり、両者に恩恵をもたらす互惠的関係が成立している。
i : 自分の力で課題に取り組む。(個人作業、自力解決)
ii : 困ったとき、考えてもわからないときに、「教えて」と訊く。 |
|---|

iii : 「教えて」と言われたら、わかるまで丁寧に教える。

(答えを教えるのではなく、問題の意味や解き方、理由などを教える。)

②「異質な他者との学びの協同化」

自分とは異なったものの見方や考え方、感じ方をする他者との対話を通して、自分だけでは体験し得ない学びを、一人一人の子どもにもたらすこと。

i : 自分の考えをもつ。

ii : 関わり合いをもつ。(自分の考えを話す。相手の意見を聞く。)

iii : 自分の考えと比べる。

iv : 情報(人の意見)を取捨選択する。

v : 自分の考えをまとめる。(自分の考えを深め広げる。)

※ 互いを認め合い、尊重し合う学級風土

(6) 班学習とグループ学習との違いを明確にもつ

<班学習(教え合い)>

- ・ 班長を決める。
- ・ 教え合いをした後、班で意見をまとめる。
- ・ 分からない子には積極的に教える。
- ・ 教師は班としての結果を求める。
- ・ 教師が班ごとに挙手させる/班を指名
- ・ 代表が答える。時には分からない子が(誰かに)教えてもらって答える(オウム返しになる)。
- ・ 「分からない子に教える」という一方的な学習が展開される。(上下関係をつくる)
- ・ 分からない子は待つ子になる。待つ子は、教えてくれない子を恨むようになる。

<グループ学習(学び合い)>

- ・ 班長は決めない。
- ・ 話し合いはするが、グループとして意見はまとめない。(学びは「個で始まり、個で終わる」)。
- ・ 「ここはどうするの?」と尋ねられるまで教えない。
- ・ 教師はグループとしての意見を求めない。個人を指名して発表させる。
- ・ お互いが学び合う協同的な学び合いが展開される。(対等な関係をつくる。)
- ・ 分からない子は「ここはどうするの?」と聞いて初めて教えてもらえる。
- ・ 依頼ができる子になる。依頼できる子は自立できる。(分からないことを自分から訊ける子は、どこでも生きていける。)

(7) 一斉授業とグループ学習の違いを明確にもつ

<班学習(教え合い)>

- ・ 教師と発言者の1対1の対話であり、一部の参加で授業を進めている。(学びから逃げることができる)。
- ・ 沈黙と我慢の強要に耐えられない子どもが増えてきている現状に合わない。
- ・ 教師からの一方的な情報伝達は、子どもに求められる力が記憶力に偏る。

<グループ学習(学び合い)>

- ・ 全員に授業への参加が保障され、また学びからの逃避を防げる。(強制的に学びを促す)。
- ・ 自発的な対話や学びが生まれ、穏やかな空気の中で授業ができる。
- ・ 対話や学びによって、現在求められている「思考力・判断力・分析力・推論力・表現力」などが育まれる。
- ・ 協同による学習、人間関係が構築されコミュニケーション力を育む。

(8) グループ学習は、一人一人を高める学習と知る

★ 成功に導く8つのポイント

- (1) グループ学習の意義(作法)を子どもと共有する。
- (2) 学びを生み出す教材(しかけ)を準備する。
- (3) 1分の法則と7分の法則を守る。
- (4) グループに入る直前の必須の言葉かけ。
 - ① まず「何をするかを告げる」
 - ② 次に「グループになったら最初は一人で考えようね」
 - ③「わからなかったら『ここどうするの?』と訊こうね」
 - ④「小さな声で話そうね」
- (5) 学びにつまずいている子に丁寧に関わる。
- (6) グループ学習を止めるときは、集中が切れたときか、その寸前
- (7) 答え合わせは、指名した子の声を「聞く」「つなぐ」。そして「もどす」深め合う学び合いの場にする。
- (8) 授業は共有とジャンプがある二段階構成にする。

(9) 「学び合い」のある授業づくりの前提条件

★ 子どもたちに「安心感」と「学びの機会」を保障するための規律

①「生活・学習規律」 …学校と家庭が協力して整えていく	○早寝・早起き、朝食、あいさつ、服装、整理整頓、掃除 など(生活)
	もの ○学習用具の準備、家庭学習の習慣など(学習)
②「授業規律」 …教師と子どもとの間でつくるもの	○子ども同士が学び合う授業を保障するためのもの ・「聞く」ことと「話す」こと(他者に言葉を届ける)が基本 作法 ・「学び合い」は「聞き合い」から …体を向け、分かろうとして、うなずきながら、 最後まで聞く

(10) 「学び合い」を支える人間関係づくり

★互いを認め合い、尊重し合う学級風土(教科指導の中で)

①「人を大切にしようしくみづくり」

- ・仲間を置いていかないしくみ→欠席者も含め、おいていかない。先に済んだ子どもへの心配り。
- ・言いたいことの言えるしくみ→聴いてもらうためのマナー、語り出しても傷つかない風土
いやと言える風土。

②「『からだ(ふるまい)』の敷き写し」

- ・子どもたちは、良くも悪くも、教師のふるまいをそのまま引き受けてしまう。教師は、からだ全体で、人を大切にするとほどのようなことなのかを伝えなければならない。

(11) 学びの授業と人権教育

① 学びの授業は人権教育の基盤になる。

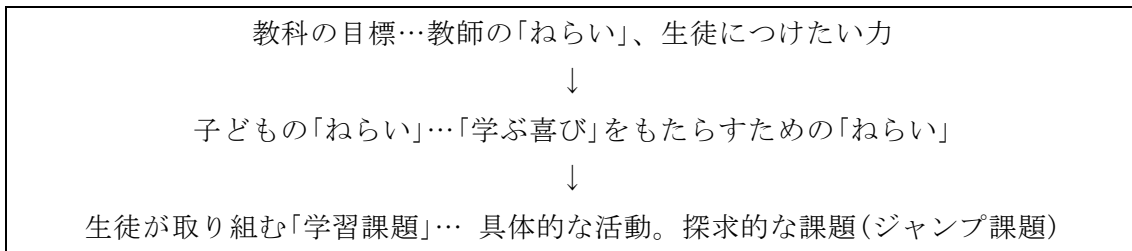
「教えたる」は傲慢と卑屈の関係が生まれる。「ここどうするの？」からは対等な関係が生まれる。

② グループ学習は一人ぼっちをつくらない。

「机をしっかりくっつける」ことは仲間をつくる。誰でも受け入れ、誰とでも話せるようになる。

(12) 学習課題

★ 生徒が主体的に学び、学習のねらいを達成するための「学ぶ値打ちのある課題」



①「共有の課題」…基礎・基本(知識・理解、易しい技能) = 「ジャンプ課題」に取り組むための学び

<個人作業の協同化> 自分の力で課題に取り組む。(個人作業、自力解決)
分からないときに訊く。個々の生徒の学びの成立。

②「ジャンプ課題」…応用・発展(難しい技能、思考力・判断力・表現力)

= 理由・根拠の考察、習得した知識・技能の活用

<異質な他者との学びの協同化> 他者の意見を聞き、自分の考えを深め広げる

(班で意見を一つにまとめるわけではない)

生徒同士の学び合いの成立

◎子どもを課題や教材とつなぐ(導入の工夫、1分以内の手当て、課題に向かわせる「手だて」

↓

常に教材を意識させる「どこからそう考えたのか?」

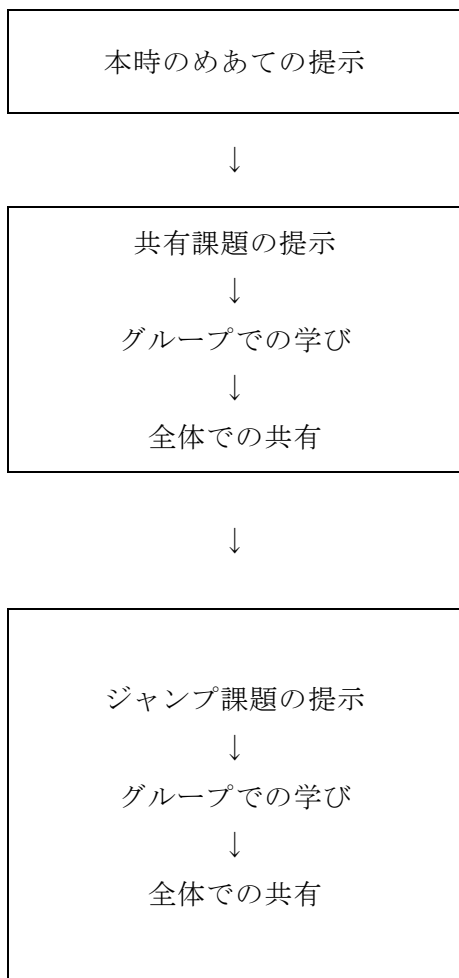
課題や教材を「媒介」として、子ども同士をつなぐ

※ 思考力：考える「すべ」(視点・方法)を与える

「考えてごらん」→「比べてごらん」「分類してごらん」「違いを見つけてごらん」

「関係づけてごらん」「前に学習したことを思い出してごらん」

(13) 基本的な授業の流れと教師の役割



- 「めあて」は明確に、「課題」はすっきりとわかりやすく
授業の最初に、本時は何を学び、何ができていれば学んだことになるのか、スタートの時点でゴールを明確にしておく。また、「課題」の説明が長いと、子どもは聴くことをあきらめたり、十分に把握できなかつたりする。「課題」は、子ども目線で簡潔にすっきりとわかりやすくする。
- 3分で「めあて」を、5～7分でグループに
子どもが、この時間に何をするのか興味・関心を持っているうちにグループにし、子ども同士が学び合う環境や雰囲気をつくる。子どもが孤立する時間をつくらない。
- モノ(具体物)を用意する
課題をイメージしやすいようにモノ(具体物)を用意する。学力が低い子どもは言葉だけでは課題につながらない。視覚・聴覚・触覚を揺さぶり学びにつなげる。
- 教師のテンションを下げる(声のトーンを落とす)
子どもと子どもが聴き合う関係になるには騒々しさは禁物。教室をやわらかく聴き合う雰囲気づくりを、まず教師がする。

(14) 教師の基本姿勢

★ 学びは子どもが主役。教師は「聞き」役。そして「つなぎ」「戻す」コーディネーター。

- | | |
|---------|--|
| ①「聴く」 | 一つは、子どものつぶやきや発言が、何を根拠に表現したものかを聞く。
二つは、子どもの発言が、テキストや資料のどこにつながって発せられたのか、他の子どものどの発言とつながって発せられているのかを聞くこと。
三つは、その子自身のそれ以前の考えや発言とどうつながって発せられているのか聞く。 |
| ②「つなぐ」 | 子どもの発言をモノログにしないために、人やモノやこととつなげる。たとえば、ある子どもの発言を他の子どもに「どう」とつなげ、意見を求める。あるいは根拠や理由を尋ね、さらに他者につなぎ、学びを深める。これを表現の共有(1往復半+α)と呼ぶ。(生徒を、学習内容、他者、自分自身とつなぐ。) |
| ③「戻す」 | 思考が深まっていなかったとき、教科書や資料集などへ戻し、思考を振り返るようにする。また、子どもがつまづいているとき、既存の知識や基礎的事項に戻して考える。 |
| ④「ケアする」 | 子どもの目、仕草、顔の表情や身体の動きなどから子どもの困り感やつまらなさ等を感じたら子どもの傍らでケアする。 |

※ 教師はなるべくしゃべらない。

(15) つなぐ工夫(教師が子どもの発言をつなぐということ)

- ・「ほかにありませんか？」→ 自分の発言が大切にされていないと感じ、張り合いがなくなる
- ・リボイス(子どもの発言を教師が繰り返す)→ 生徒の発言を聞かなくなる
- ・「今の発言に対して、どう思う？」
- ・「もっと考えたよってこと、ある人？」 …… 普段から訓練する
- ・「みんな、つないでくださいね」
- ・話型にとらわれすぎず、話型から入って、話型から出て行く
- ・子どもの発言をつなぐ。教材にもどす(話し合いが空中戦にならないように、根拠を求める)
- ・「だいぶつながったねえ」→ 最後に自分の考えを書いてまとめる
- ・テキストやワークシートとつなぎ、テキストやワークシートが媒介となって子どもがつながる
 - *物理的な距離を縮める。(グループの人数は3～4人。机はくっつける。)
 - *つないでも大丈夫なように準備する。(周りの子どもと関われる媒介を用意させる。)
 - *わかることとわからないことを区別してやる。わからないことを班の人に聞かせる。

(16) 机の配置

- ① 一斉指導……………男女二人ずつ机をくっつける。(市松模様)
- ② グループ学習……………3～4人の男女混合の学習班。班長は不要。(市松模様)
- ③ コの字型……………教室前側4列→左右3列ずつが中央を向く。

男女二人ずつ机をくっつける。

- ※ 机の上に必要な物だけを出す。(筆箱などは、学び合いのじゃまにならないように置く)
- 机の横に荷物をかけない。
- 机と机をきちんとくっつける。(欠席者の机もくっつける。)
- なぜそうするのか、生徒に説明する。

(17) 授業の展開

<p>はじめ 【導入】</p>	<p>5～7分 [一斉]</p>	<p>○授業の目標(めあて)と本時の流れ(見通し)を示す。 「みんなで～できるようになる」ことを目標(めあて)とする。 ○「共有の課題」の提示。短時間で説明する。 ※導入を工夫する。学びが発生する仕掛けづくりを行う。</p>
<p>第1段階の グループ学習 【共有の課題】</p>	<p>13～15分 [学習班]</p>	<p>「個人作業の協同化」…個々の生徒の学びの成立 1)自分の力で課題に取り組む(個人作業、自力解決)。 2)困ったとき、考えてもわからないときに、「教えて」と訊く 3)「教えて」と言われたら、わかるまで丁寧に教える (答えではなく、問題の意味や解き方、理由などを教える) 「基礎・基本」…知識・理解、易しい技能 「ジャンプ課題」に取り組むための学び 例1…プリントによる例題と練習。 例2…板書の()を埋める。 個人が教科書などを読みながら作業する。わからないときに 班の人に訊く。教師は生徒の学びが成立しているかを見取り、 助言は最小限にとどめる。</p>
<p>確認・説明 【全体学習】</p>	<p>10分 [コの字]</p>	<p>○「共有の課題」について全体で確認する。 生徒の発表を中心に進め、生徒の意見をつなぐようにする。 教師による説明は最小限とし、生徒の発言をくり返さない。 ○「ジャンプ課題」の提示。短時間で説明する。</p>
<p>第2段階の グループ学習 【ジャンプ課題】</p>	<p>13～15分 [学習班]</p>	<p>「異質な他者との学びの協同化」…生徒同士の学び合いの成立 1)課題に対して、自分の考えや意見をもつ。 2)関わり合いをもつ(自分の考えを話す。相手の意見を聞く) 3)自分の考えと比べる。 4)情報(人の意見)を取捨選択する。 5)自分の考えをまとめる(自分の考えを深め広げる)。 「応用・発展」…思考力・判断力・表現力、難しい技能 「共有」で習得した知識・技能を活用する。 理由・根拠を尋ねる。分析、考察。 話し合いが中心。意見を無理にひとつにまとめない。教師は学 び合いができていない班にのみ関わる。どの班も学び合いが成 立しないときは課題に問題あり。</p>
<p>確認・説明 【全体学習】 おわり</p>	<p>5～7分 [コの字]</p>	<p>○「ジャンプ課題」について全体で確認する。 生徒の発表を中心に進め、生徒の意見をつなぐようにする。 教師による説明は最小限とし、生徒の発言をくり返さない。 ○本時の振り返り。 …生徒個々が自分の学びを振り返り、ノートなどにまとめ たり表現したりする。</p>